



見沼・風の学校

報告

サバイバルキャンプ2003 実行委員長 吉岡 隆幸 (クラブツーリズム)

サバイバルキャンプ2007 実行委員長 植松 潤 (信州大学)

松葉 早智 (陸上自衛隊幹部候補生学校)

高橋 永栄 (埼玉大学)

田口 俊輔 (県立浦和高校)

本木下 ふみ (千葉大学)

仙頭 康広 (埼玉大学)

鈴木 麻子 (地方公務員)

寺床 純三 (国立大学職員)

藤原 直子 (弁護士事務所スタッフ)

サバイバルキャンプ2004 実行委員長 矢澤秀範 (早稲田大学)

―過去・現在・未来の報告―

サバイバルキャンプ2003実行委員長

吉岡隆幸（クラブツーリズム）

「ドラムカン風呂に入りたい!」「カヌーをやりたい!」 そんな突拍子もない発言から、何と1週間も開催し、更に毎年続けるようになったサバイバルキャンプの2年目を実行委員長として関わって、そして今思うことは「サバキャン実行委員長が自分の始まり」だということです。

僕が実行委員長を務めたサバイバルキャンプはまさに雨の1週間でした。



初日に襲った集中豪雨、避難警報、氾濫した加田屋川。雨対策を今まで考えてこなかった僕らは見事に自然の力に畏れを抱きました。

それでも1週間を、誰も怪我人を出すこともなく終えることができたのは、ひとつの成功といっ

ていいと思います。まさに自然に試されたのだと思います。だからこそ、それを乗り越えた最終日は悔しいくらい

晴天になったのです。

自然の他に僕がぶち当たった壁はスタッフ同士の共有意識のなさでした。「お前は自分の守備範囲しか守っていない。そんな奴は農園には必要ない!」と頭領に一喝されたことは今でもよく覚えていますが、そう言われてしまうくらいに僕ははじめ他のスタッフも他の人の作業が見えていませんでした。

怖い怖い頭領に殴られたくないので、次の日からは「声を出し合うこと」を頭に置いて、みんなで一斉懸命声を出し合いながら作業に集中しました。

「自然の偉大さ」「みんなで声を出し合っ一緒に何かを創りあげていく」ことをサバイバルキャンプで学び、そして今の僕が思い出せるのはこのふたつです。このふたつは、今考えると本当に生きるうえで大切なふたつだと思います。人は自然の中で人と生きていく。それが本来の僕たちの姿だと思えます。

その本来を維持するのに大切なことを、サバイバルキャンプは僕に教え、今でも確かに僕を支えてくれています。だからこそ、「サバキャン実行委員長は自分の始まり」なのです。

子どもだけの反省会を開いたのもこのキャンプが初めてでした。自然と向き合った自分たちが、自分たちの言葉で語り、知恵を出し合い、共に方法や答えを生み出していく。そういった経験ができた子どもたちの顔は、最終日になるにつれて明らかに変わっていきました。この経験を彼らがいっつまでも覚えていてくれるといいなと思います。

みなさんもご存知の通り、現在の僕はサラリーマンです。早いもので2年目も半分を過ぎて、まかされる仕事や自分から提案する仕事がほとんどとなりました。

旅行業という仕事柄、とても出歩くことが多いですが、僕が仕事をする理由は「広い世界を見て自分で決める」ためなので、まさにぴったりの仕事だと思って励んでいます。

今年に入ってから環境を変えて千葉で農業をすることになりました。

農家が始めたペンション内の土地を使って、紫黒苑という黒米や野菜を無農薬で頑張って作っています。今年チャレンジでいろんな野菜を育ててみましたが、1年目にしてはそれなりに美味しくできました。見沼で培った技術が確実に活かされているのを感じながら、改めて農業の面白さ、その自由さを初心に帰って感じています。

新しい環境の中で忙しいときや疲れたときには、「自分が頑張ることが見沼へ帰るためになる」と思いながら何とか頑張っています。しばらくは見沼に集中して関わることができないと思いますが、広い世界で手に入れた新しい視野や力を見沼に吹かせられるくらいの風男に成長してから、堂々と見沼に帰って、また以前のように見沼に集中したいと思っています。とりあえず帰るための場所はさいたま市に置いたので、あとは僕がもつともつと成長するだけです。

時間がかかるとは思いますが、こうやってゆっくりと自分を少しずつやり直したり、磨いていたりしながら、過去と現在を未来に繋いでいきたいと思っています。

サバイバルキャンプ2007実行委員長

植松 潤 (信州大学)

1年の感想と来年について

今年も農園へは帰省しては単発でイベントや作業に参加した。来年はサバキャンの実行委員長をやることになっている。今後の自分自身の課題や、ミヌカゼとしての自分の思い、今後について考えてみたい。

今回エココンでは学生の環境活動を発表するというところで、戸澤、高橋、林、本木下と自分の5人で参加した。プレゼン内容を決めていく段階で、次の世代が見沼、福祉農園、風の学校について、自分の考えや、自分自身がどのように関わっているのか見つめなおすことが一つ目的としてあった。

●進めていく過程でのいくつかの課題

・参加者を募集する

今回参加者を募集するに当たり、メールでの呼びかけや、直接電話するなどして、参加者を募っていたが、連絡や説明の不十分、呼びかけるメンバーが限定されていたこと。全体へはメールで呼びかけても、積極的な参加を促すには幅広く、個別に連絡する必要があった。

・参加者との連携・分担

当日本番までの必要な準備や流れを把握し、適時連絡を取り合い、的確な仕事分担を行うことが円滑に行われず、期限がいつもぎりぎりになって

いってしまったこと。

・見沼、福祉農園、見沼・風の学校をどのように表現するか自分が関わってきた今までの活動をどのように表現するのか。見沼、福祉農園、見沼・風の学校を説明するために必要な知識や、農園や見沼・風の学校が抱える問題意識や課題などの把握が不十分であること。

●エココンに参加して思ったこと

・コミュニケーションの課題

参加者を募集する、連携、分担などに関しては連絡、コミュニケーションが重要であり、中心になっていく人間が的確に行わなければならないかった。コミュニケーションをとる際にも、そのイベントがどういったもので、どういった形で進めていくのかについても、その後の流れや内容の把握などをしっかり行っていないければならなかった。

・実践としての場

外部に向けて表現することについては、今まで活動を表現する機会が少なかったため、自分たちが日々どういったことをしているのか把握する場が必要であった。自分自身が見沼での経験が不足していることもあり、問題意識などがきちんと把握できておらず、プレゼンの内容についてもポイントを抽出する作業で大変苦労した。

またどのように表現することを迫られることで突き詰めて考えることもでき、その過程を経ることで具体的な課題であったり、問題意識を共有することが出来る。

今後について

エココンでの実践を行って見て、結果的に参加メンバーや浩平さん純三さんらと発表内容を話し合うことで、かなり時間をかけて深いコミュニケーションが取れたと思う。また、自分たちの関わりや、農園や風の学校がもっている問題意識などを積極的に把握しようとしてきた。今回こういった機会があったことで、今までの流れなどを把握することが出来た部分もあった。自分は一年目から関わってきたことで、今までの流れをおおよそ理解していた。しかし、メンバーの代替わりなどが行われることで、過去にどういった問題意識、課題があったなどを把握する作業が部分的に欠けていってしまう。活動に参加する深度に影響もあることなので今後、次の世代への引継ぎが必要だと感じる。

●具体的な課題として

・引継ぎ・継承

経験、仕事(知識)、考え(問題意識)などのノウハウの継承が次世代には必要であり、今まで固まっていたことで徐々に意識が共有できていた古参メンバーが一度に卒業するため、引継ぎがなければまた、はじめからということになっていってしまう。卒業メンバーを中心にそれぞれが感じてきた意識や知識などを積極的に伝え、次世代はそれを知ろうとする努力が必要だと感じる。

・継続的な関わり (社会人・古株メンバー)

また一年目から関わっていることを思えば、一緒に畑に関わっていた人が、来なくなってしまう

ている現状がある。それぞれ社会的な立場や、それぞれの思いがあるにしろ、一緒に作業していた日々を思えば純粹に寂しい。今後、今まで関わっていたメンバー、卒業していくメンバーが多いうる中で、継続的にどのように農園と関わっていくのか、考えていくことも必要なのではないか。

・スタッフ獲得へ

逆に農園に関わる人に広がりがあるにしろ、新たなスタッフなど核となっていく次世代を増やしていくことも必要になってくる。先日の代表との話の中から、より個として関わるつながりなどを大切にしながら、ということがあった。全体が個人と繋がる、組織の中の個が個人と繋がる。

・地域、他団体とのつながり

今までの関係を見ていく中で、近隣の農家との関わり方や他団体との連携を、次世代メンバーが中心となって、組織としてどのように関係性を作っていくかなども地道に連携をとる中で考えていかなければならないと思う。連携をとる上で、意識を全体で共有する作業を怠ってはいけないし、農家の方や他団体との連絡も密にしていかなければならない。

・障害をチャンスへ

古参メンバーの卒業によって、今まで組織の上の方で処理されていた問題が下に落ちてくる。その機会を成長へのチャンスだと考え、積極的、自発的に関わっていくことが出来る。今まではあるものをただ単に踏襲するのではなく、自分たちの問

題意識なども照らし合わせながら必要なことを行っていかねければならない。組織としても世代が厚みを増し、学生としてだけでは新しい新たな関わり方が模索されるなか、人と人、人・土・人との関係などの繋がりを大切にしながら、自身、基本的な土のかかわり、農を中心にした生活を忘れないようにして、来年を進めて生きたい。全体で仕事も意識も共有できるようにコミュニケーションを基本に大切にすることをもう一度見つめなおしたい。



松葉 早智 (陸上自衛隊幹部候補生学校)

今年には社会人1年目、しかも九州での寮生活ということで4月以降ほとんど活動に参加できませんでした。MLの情報を流し読んだり、HPや写真掲示板で情報を得たりすることが辛いときの支えになったりしました。

まとまった休暇のときにしか顔を出せない私でも、農園に顔を出せばすんなりと皆の輪の中に入ることができて「帰ってきたなあ」という実感を得られました。いつでも帰れる場所があることで、知らない土地でも頑張れたのだと思います。

来年は幹部候補生学校を卒業した後、どこに配属になるのかわかりませんので、正直今年と同じようにGW、お盆、正月くらいしか農園に顔出できないと思います。

来年だけでなく、5年後の展望というところで言わせてもらえば、この先の5年間は自分の仕事の基礎や生きていく方向を固めていく時期になると思います。なので、農園での活動にどのくらいの頻度で顔を出せるかまったく予測が付きません。

どんなに忙しくても今年と同じように年に3回は顔を出すという感じで細く長く農園にかかわっていきたいと思います。

農園にも還元できる何かを身に着けるために、暫くは仕事に全力を尽くします。

高橋 永栄 (埼玉大学)

今年の感想・来年の展望

今年を振り返ると、農園の存在や農園での時間が自分の中でも大きかったと思います。まさか、大学3年になってから、耕耘機を使ったり、一週間見沼でキャンプしたり、ねずみの糞や死骸と格闘するとは思っていませんでしたが、とても貴重な経験ができました。そして、たくましくなつたようです。

正直、私はどうしてここで、こんなことをしているのだろうと思うこともありましたが、それでも、行く度にたくさんの人に出会え、今までできなかったこともできたので、ここに出会うことができて、本当に良かったと思っています。

3月に初めて来て、何度か通ううちに、ここでの1年を見てみたいと思うようになりました。もう少しで1年です。今は、追い出されない限り、農園と関わっていききたいと思っています。来年はあまり農園に来られなくなると思いますが、私自身、もつと成長し、自分の力を伸ばしたいと思えます。

まだまだ知らないこと、できないことがあります。ですが、知っていききたいし、できるようになりたいと思うので、今後どうぞよろしくお願ひします。

田口 俊輔 (県立浦和高校)

今年の感想、来年への意気込み

1. 今年の感想

2006年、高校受験を控えていたため、最初に作業に参加したのは、3月第1週の作業だった。今年は例年にも増して、いろいろなことがあり、ぎっしり詰まった1年間だったと思う。そして何より、勉強になった1年間だった。

その中で、印象に残る事柄を挙げたいと思う。

一つ目は、

春休みのタイスタディーツアーで、 Deng 熱にかり、それが治ってから初めて参加した、ゴールデンウィークの作業のときである。

暖かく迎えていただいて、前回農園に行ったのが3月の追いコンであるということが、ウソのようだった。農園の作業に再び参加することができて、本当に良かった。

二つ目は、

サブキャンの前に、県庁への挨拶やテントの拝借に参加したときである。

県庁への挨拶は学校の補習があったため、途中で抜けたが、印象に残っている。私はただ、横にいて挨拶の内容を聞いていたりしただけだったが、このようなことを経て、サブキャンは実施されるのだということを知った。

また、浦高の山岳部に、サブキャンで使用するテント借りた。そういう支えがあって、農園の活動は成り立っているのだということを実感した。

三つ目は、

様々な会議に参加したことである。盗難事件対策会議、スタッフ会議、見沼学編集会議、農園協議会…。

まだまだ自分から発言するには至らないが、農園がどのように運営されているのかを、知ることができた。

また、会議の内容を高校生メンバー内で報告し、議論することができるようになった。

以上のように、非常に勉強になった1年間だが、それをどう2007年につなげていくのか。それを来年への意気込みとしたい。

2. 来年への意気込み

私たち高校生メンバーにとって、来年の重要な活動として、まずは高校生若衆がある。

現段階ではわからないことだらけで、会議もなかなかほかどらない状況にある。会議が進むごとに、意見のぶつかり合いが激しくなり、なかなかまとまっていけない。

しかし、「何とかして、高校生若衆を実施したい」それが現在の率直な気持ちだ。

他にも、私の農園での能力のパワーアップを図りたい。来年、今まで農園を担ってきた、大学生のスタッフの方の大半が卒業する。そういった方たちに、少しでも近づきたい。そして将来、農園を担うことができるようになりたい。

ふらりと農園にやってきてから、8ヶ月経ちました。初めはただ野菜を食べただけで、見沼田んぼが卒業制作の舞台になるとは思っていませんでした。

耕し飯を食らい語る



ここをたくさんの人に知ってもらいたいという気持ちになったのも農園にちよこちよこ足を運ぶようになって、汗かいたり、おしゃべりしたり、だんだんと農園の顔というものが見えてきたからなのだと思います。

本木下 ふみ (千葉大学)

私は卒業後、社会人の一員になります。都会で生活する人に緑の良さを伝えたいという思いがあつて仕事を決めたのですが、農園を知ってから見沼田んぼを近くに感じ、今は、農の良さを伝えたいという気持ちでいっぱいです。

ただ、仕事は自分の思いだけでは成り立たないものだし、その中でできる最大限の力を尽くしたいと思います。勤務地がどこなのかまだ決定していないんですが、農園にはこれからも関わってきたいです。

仙頭 康広 (埼玉大学)

今年は自分にとって、多くの意味で考えさせられる一年だったと思います。サバキャンなどの数々のイベント、普段の農園での活動などで、今まで農園を支えてきた世代との大きな差を感じた時。感情的になり、農園から離れようとした時。自分としては情けないことに後者の方が強烈に残る一年になってしまいました。

正直、12月の当初は、もう、農園に行くつもりはありませんでした。どう「逃げる」か。それを考えていました。でも、週末を寮でダラダラ過ごしている自分が、「普通」になることになぜか違和感を感じていました。

そして、そのことを友達に相談したりするなかで気づいたことは、やっぱり自分は農園が好きなんだな、ということでした。

確かに、農園で活動していると、楽しいことば

かりがおきるわけではないし、大変なことやつらいことも経験すると思います。でも、それを含めた農園が、自分は好きです。僕は、自分に甘い人間です。それを学園祭で嫌というほど思い知りました。これからも、ともすればそれを出すと思います。それを農園で克服できたらと思っています。具体的に今後、農園とどのように関わっていくのかは、情けないことに決まってはいません。農園にどのような意味を持つていくのか。ようやく1年たつてそれを考えるようになったのかな、と思います。

代表には12月24日に自分の気持ちを伝えましたが、もう一度言いたいと思います。

正直、ちゃんとした謝罪もせずと言うのは、非常に失礼だとは思いますが、もう一度、農園でやらせてください。皆様、よろしくお祈りします。



鈴木 麻子 (地方公務員)

卒業後、地元館山に帰り社会人となってから、農園に行けたのはサバキャンの一回のみでした。その時には、メンバーや農園自体の変化した部分と変わらない部分とが客観的に見えた気がしました。

四月以降は、とにかく毎日があつという間という感じでした。社会福祉課の障害福祉係に配属になり、色々な関わりの中で沢山のことを学びながら日々奮闘中です。

そもそも私が館山に帰ろうと思ったのは、自分の生まれ育った土地で何かしたいと思ったからです。農園で活動する中で自分の生まれ育った場所で結びつきを大切にしながら、何かしらの形で貢献していく生き方があると知りました。

私にとって埼玉の地と仲間は館山と同じくらい大切です。でも館山には若者がいません。過疎と高齢化が著しい上に財政破綻予備軍なので私は館山を中心に農園で学んだように活動していきたいと思います。

まだ今はとりあえず帰って、食い扶持を稼ぎながら、知っているようで知らなかった地元の状況を知ろうとしている段階です。具体的に何をすればいいのかも見えていません。が、色々なひとと関わり合いながら考えていきたいと思っています。

農園には来年以降、年に2、3回は顔を出したいです。今は農園に対して返せるものがないけれど、いつか農園にも何かを返せるように当分は館山で力を着けていきたいです。

寺床 純二 (東京大学職員)

今年の感想、来年の展望

社会に出て4年目に入り、休日の活動も増え、農園に来る回数は月に1回あるかどうかというペースになっていました。そして農園に行く機会に限られているので、行く時は何か目的をもって行こう、と思うようになりました。

サバキャンで井戸の屋根を作るために今日は長さを計ろう、図面を描こう、とか、次手伝うイベントの打合せをしに行こう、とか。実際屋根作りが私の今年一番の実績です。しかしサバキャンが終わると特に行かなくては、と思うこともなく、また月1ペースに戻ろうとしていた頃、秋の農的若衆宿二日目に行き、駅からハイキングの会場でハーブを販売する場に立会いました。優美さんやナオスケがハーブの販売をしている話は聞いていて、店には笑顔で愛想よく売る優美さん、ナオスケ。笑顔だがどこを見ているか分からない横山君。「なぜ？」と聞くと、埼玉の学園祭で農学会の店を出すのでその練習という。

コンビニでバイトしている割に接客慣れしていないし、売らなきゃ！っていう意気込みも感じなかったもので、学園祭は大丈夫かなあと心配になり、学園祭を見に行くことに。

学園祭の初日に手伝いに行ったものの結果は結構赤字が出たようで、埼玉2年生達はかなりの落ち込みよう。

それを見て、本番の手伝いだけではなく、心配ならやはり準備の段階から関わらなくてはいけない、準備段階を充実させれば結果に関係なく得

るものがあるのでその手伝いをしたい、と思い12月にある「エココンテスト」は準備段階から首を突っ込むことにしました。

こうして振り返ると、外で「農園へ何をしに行こう」と考えて行っていたときよりも、あまり考えず農園の物や人に関わっていた時のほうが圧倒的に多く農園に行っています。

昔から農園では「来て感じろ」と言われてきましたが、どんな立場の人間にも向けられるメッセージだと再確認しました。

また去年から浦和へ住むようになったのですが、以前は近所のスタッフと農園の話題を話していても展開が速くてついていけませんでした。

しかし農園に頻繁に顔を出すようになった最近では農園の話題が面白くてしかたありません。そしてこのとき浦和(地域)に住んでいるのだな、と実感します。

来年も今年後半のような動きで地域に住んでいる実感味わっていききたいと思います。



藤原 直子（法律事務所スタッフ）

今年の感想と来年の展望

今年は、動いて話していくなかで「自分の位置」を実感し、その実感を動き話すことによって繋げていく。それを少しずつやる、というような一年だったと思う。

結構長く風の学校にいるけれども、いろいろな圧倒的な存在や雰囲気を目の前に行き方に迷ったり、でも何か離れられないものがあつて行ったり、と。そういうことを繰り返してきた。

その中で、中途半端にしか状況も作業も分らないまま、ここまで来てしまったと思う。

そんな、とても頼りのない存在である私だけけれど、それでも、人との関係性の中に生まれた何かしらの自分の位置を持っているわけでもある。

今から考えると、それを去年までは、結局風の学校の中にしか実感を持って感じられてなかったのだと思う。

実は、風の学校の中に位置をもっているということは、福祉農園の中にも位置をもっていたということ。位置は初めからあつて、それは発見するかしないか、それだけだったのかなと、今思う。

そうやって発見したことで、「風の学校」と「見沼」との間に、知っているけれど意識の上ですると抜けてしまいがちだった「見沼田んぼ福祉農園」という存在がとても大事なものに思えた。

それに実感を伴って気付けたことで、以前より問題意識などがより身近に共有できるようになったと思う。

そして、平日作業に参加するなかで他団体の

方々と交流が増え、違った広がりを持てたことが単純に日々面白かった。

これらのことに、社会的にも若干あやふやな立場で生きている今の状態で出会えたことが、私にとって意味が大きかったのではないかと思う。

ただ、風の学校の週末作業になかなか参加できなかったことは残念だった。

共同事業に関しては、まだまだ本当に課題は山積みで、明確なものを信じて進んでいける道が見付かっている訳でもない。しかしそれは、今までの歴史とか制度的な現状とか、それらを背負った人の痛切な思いとか、そういうものが混ぜこぜになって今が在るからだと思う。

だからこそ、それを悲観するのではなく、着実に一歩ずつ進めるようにしていきたい。

農園の今までの歴史とこれから生まれる歴史を繋げるひとつの在り方になれるよう、進んでいきたいらいいと思っている。

来年について。こうやって、人間関係とか面白みとか、関わったが故の自分のなかに生まれる能動的な「責任感」みたいなものを通して、来年度もどうにかこうにか関わっていくのだろうと思う。

自分自身、進路が決まっていけないので、何曜日に関われるとか、どの程度関われるなどというのは簡単に言えないけれど、自分の進路に迷い、動き考える中で、結局今一番の目標になったことは、「自分で立って生きる」こと。

そして、その「自分で立って生きる」日々の暮らしの中ほどの程度やりたいことを関係付けられるか。それが、今の課題だと思う。

やりたいことは、何かをやってモノを見て、モノを考えている限り次から次へと生まれ出てくるわけ。

だからこそ、いろいろなことを細々とも長く続けたい。そのなかに農園で動くことも確実に入ってくる、そういうように思っている。



サバイバルキャンプ2004実行委員長

矢澤秀範（早稲田大学）



見沼はぼくのキャンパスだった

その農園は、風景も人模様も日々変化していた。風が生み出す生命力が、そこにはあった。

自然の猛威に驚愕すると同時に、野菜が実り樹木が勢いづいていく時の感動を味わった。

仲間たちとの交歓があり、ぶつかり合いもあった。その度にぼくはすかさずシャッターを切った。そうして切り取られた情景は、今や思い出となりひとつひとつに解説を加えることができるが、その臨場感を再び味わうことはできない。

これからも新しい何かに出会い、感動することができるだろう。それが日々変化する農園の魅力であるからだ。

ぼくは福祉農園を中心とする見沼の地で、青春時代を過ごした。仲間たちとの出会いがあり、知

の探求と技術の習得があり、たくさんの遊びもした。大学にあまり通わなかったぼくにとって、見沼は広大な夢広がるキャンパスだった。

農園の日々

農園での日々はあまりにも多くの出来事があったが、ここでは大まかに各年度の自分の農園活動を振り返ってみる。

①二〇〇二年度（大学一年生）

高校の同窓生吉岡に誘われて農園に遊びにいったのが2002年の五月。

次に訪れたのはサバキャン前日。よく分からないままにスタッフになってしまった。

キャンプという非日常の中でスタッフや子どもたちと過ごす日々は、まるで冒険のようであった。

農園や見沼があまりにも広いところだと感じた。梶間さんや金子さん、工藤さんといった個性が強く、ものづくりが上手な先輩スタッフが多かった。

南浦和から通うわくわく号の車内での会話も楽しかったが、少年団のない日は車が出ないのでバスで通った。月に一回の「のうぎょう少年団」は、子どもと触れ合っただけだった。

野菜を収穫したりしたが、自分で何かを育てた記憶はない。

一月にデジタルカメラを購入し、記録を撮り始める。冬場の暗渠掘りや土作りなどで、徐々に身体ができてきた。越生の総括研修で梶間さんから会計を引き継ぐことになる。

②二〇〇三年度（大学二年生）

春から夏にかけて播種や育苗をしていく中で、野菜作りの面白さが分かるようになってきた。

夏前にローンを組んでパソコンを購入。「教科書」作りやサバキャン等の資料作りがスムーズになった。

サバキャン準備では役所関係や報道関係周りを経験。この年はほとんど大学に行かずにテラスで過ごしていた。

日々の営農や少年団、事務作業がとても楽しく、馬場ちゃんとテラスで食べるご飯も美味しかった。

だが、コッペさんがアメリカから帰国し、馬場ちゃんの研修が終わると同時に、その蜜月は終幕の時を迎える。

免許を取得したので、年明けから車で通うようになる。これで行動範囲が広がる。大網白里町の総括研修の帰りに急性胃腸炎になり入院。

③二〇〇四年度（大学三年生）

車を自由に使えるようになったので、時間のあまる平日は農園に立ち寄り、見沼の散策をしたりした。

以前あった「農園は広い」というイメージはなくなったが、「見沼は奥が深い」ということに気が付いた。

サバキャン実行委員長に内定していたので、それに向けての営農技術の向上や人間関係の形成などを進めた。

直前になって、「のうぎょう少年団」の低年齢化などによる諸問題が発生。スタッフ間や父兄と

の話し合いが頻繁に行われた。

サバキャンは晴天が続いたのでなんなく終わる。自分が実行委員長をしたのに、今までの五回で一番印象が薄い。

秋から「農的若衆宿」が始まる。この頃から体制がしっかりし、また、知的の水準が高くなってきた。コツペさんや石井ちゃんの知的リーダーシップにくらいついていくのが楽しかった。

④二〇〇五年度（大学四年生）

途中で就職活動をやめてしまってから精神的余裕が出てきた。NPO 法人良い食材を伝える会「食材の寺小屋」スタッフとなり、各地域の食材や加工についての勉強をすることで見聞が広がり、人脈も広がった。

鈴木拓也サバイバルキャンプ2005実行委員長の体制基盤が整ってくと同時に、中核スタッフとしての自覚をする時期になった。

『見沼学』の編集過程で、行政について、見沼について、南部領土について、そして農園について実践しながら考えることが増えた。

新治村の総括研修の帰りに、車をぶつけられる（助手席の常義とともに無事）。

⑤二〇〇六年度（大学五年生）

ダイケアわくわくの平日サポートを始めた。

良太さんや晴彦、藤枝さんと共にする作業は、作業のリズム、時間の流れ、役割分担がしっかりしていて、風の学校の作業とは違った一面がある。作業後は良太さんと県庁ショップ「かつぽ」に移動して、注文書を各課に配ったり、野菜販売の精

算を行ったりする。

またぺんぎん村との共同事業《ハープ加工》が始まり、できる限り参加した。

農園五年目でありながら、新しいことをいろいろ経験できた一年であった。卒業までの残る日々は、農園での活動を精一杯頑張りたい。

⑥二〇〇七年度（駆け出し記者）

今までの農園活動で得た経験、持った問題意識、学んだ社会の理想と現実を、選んだ職業に生かし、そしてまた勉強の日々である。

現時点では赴任先が決まっていないので何とも言えないが、いずれにせよ農園には顔をほとんど出せないであろう。

しかし、農園との関わりは途切れることなく続けていきたい。

ぼくが過ごした農園の日々

ぼくが過ごした農園での日々で得た成果として、「場の創出」があげられる。

農園という「場」は、単なる仲良しグループの利用するレジャー施設ではない。

よりよい作物ができる土づくり、風や日差しを遮るための植樹、安全に作業ができるスペース確保、老朽化した水周りや道具小屋の建て直し、そういった営農条件を整え施設を整備すること。

これらは必要不可欠でありながらも、つくる過程に遊び・楽しみ・喜びがあった。結果として快適な「場」が出来上がった。

また、それがもっと大きなスケールとなって、農園に携わる協議会団体をも巻き込んだ共同事

業となっていくた。

試行錯誤の段階であるが、農園の生産物を加工品として販売していく中で、あるいは仕事をサポートしていく中で、農園を軸に地域で生きていく仲間たちとの「場」をつくり上げようともしている。

そして、社会人スタッフがそれぞれの生活の基盤を農園との関わりの中に置き、農園という「場」づくりから、それぞれが生活する「場」の創出へと模索し始めている。

見沼という地を仲間とのつながりを確認しあう「場」としてみる農業者たちもいる。

『見沼学』の編集を通して学んだことは、時代の波にもまれながらも、自分の生活基盤を確固たる意識を持って生きていく人たちの姿であり、公共空間における利害に安易に妥結を見出さないう覚悟を持って問題解決に向かう人たちの姿であった。

この見沼での「場の創出」に夢と希望を持って関わる風の学校は、新たな段階に移行してきたといえるのではないだろうか。

ぼくもまた、キャンパスだったこの農園、そして見沼を、自分の生きる場所として戻ってくる時が来るだろう。